

児童がテーマへの思いを深める話し合い活動の工夫

－第6学年「パネルディスカッションをしよう」の実践より－

長岡市立上組小学校
教諭 中村 周

I 研究主題設定の理由

今、求められている国語力の一つに「討論する力」がある。学習指導要領では、討論の一つとして、パネルディスカッションを例示している。パネルディスカッションは、話し合いで異なる意見や対立する意見が出たときは、準備した資料などに基づいて明確に対応することが必要となる。パネルディスカッションはまた、討論の仕方を理解したり、練習したりするために大変有効な手段であると考えられる。しかし、自身のこれまでの実践を振り返ると、パネリストが発表するだけにとどまり、質問や対立する意見が出ないなど、話し合いが一方的になってしまうことが多々あった。また、パネルディスカッションを通じて、思いが変わったり、深まったりする児童が少ないことも問題点であった。これまでの自身の実践のワークシートやビデオなどを分析すると、これには、三つの原因があることが分かった。

一つ目は、児童が話し合いのイメージをつかめないことである。パネルディスカッションは、児童にとって初めての経験となるため、見通しをもちながら準備をしないと、話し合いへの意欲が高まらないばかりでなく、資料が希薄になり、話し合いが十分盛り上がらない。

二つ目は、パネリストとフロアのテーマに対する知識の量に差があることである。この状態で話し合いを行っても、前に出たパネリストが意見を述べ合うだけにとどまり、対立した意見について知識をもたないフロアからの質問や意見は期待できない。

三つ目は、テーマに対する自分の思いが薄いことである。「ぜひ、こんな車をつくってほしい」「絶対にこんな車をつくるべきだ」という強い思いをもたない状態での話し合いは、友達の意見に迎合するだけになってしまい、自分の意見を主張したり、時には戦わせたりする段階まで高められない。

そこで、話し合い活動の単元構成や学習形態を工夫することにより、パネリスト、フロアを含むすべての児童がテーマについて知識を深め、さらに自分の強い思いをもちながら話し合いをすることができるのではないかと考え、本実践を行うことにした。

II 実践の手立て

1 ビデオ教材やNHK動画教材を活用する。・・・話し合いの見通しをもたせることで、適切な資料収集をさせる

活動の初めに、ビデオとNHK動画を教材とし、パネルディスカッションの手順や、話し合いのコツをつかませる。これにより、児童は、話し合い活動への意欲を高めるとともに、見通しをもって資料集めができると考えた。また、教材には、児童の生活に関わりの深い「車」を用いることにした。授業者の友人が東京の自動車会社に勤めていることから、彼と相談し、子どもたちの思いを社内の製品開発のプレゼンで伝えてもらうことにした。児童には、彼から「未来の車づくりについて子どもたちのアイデアがほしい。」という依頼が来たという設定にしてメールを送ってもらった。

2 学習形態を工夫する。・・・個人とグループでの活動を通して知識を深めるため、次のような順序で学習形態を組む

- (1) 自分の「思い」の基となる根拠に着目させる。・・・個人
- (2) グループで情報交換し知識を深める。・・・グループ
- (3) グループで深めた知識を基に全体で考える。・・・全体

3 提言に用いる言葉を吟味させる・・・テーマに対して強い思いをもたせる

個人で考えた提言を、グループ内でプレゼンし合い、班の提言として一文にまとめる活動を通して、よりよい提言を考える。違う言葉や語尾などを吟味させることで、言葉にこだわりテーマに対して強い思いをもたせたいと考えた。

4 パネルディスカッションの準備や本番ではグループによる共同作業を行わせる。・・・準備や話合いに全員を参加させることで、思いを共有し、より強い思いをもたせる

パネルディスカッションの準備を全員で行うことで発表を一部の児童だけのものとし、思いを共有させたいと考えた。また、本番では従来のパネリスト・フロアーの立場を保ちながら、パネリストが発表するときは話合いをした同じグループの児童が ICT 機器の操作や、質問への受答えをしてもよいこととする。そうすることで、パネルディスカッションに全員が参加し、積極的に発言できるようになると考えた。

Ⅲ 研究の実際

(研究対象 6年2組 32名 男子19名 女子13名)

1 単元名『未来に造りたい夢の車』(国語科:「パネルディスカッションをしよう」より)

2 ねらい

テーマについて自分の思いをもち、パネルディスカッションを通して考えを深めることができる。

3 指導計画(全10時間)

次	時	学習内容	学習形態
1	1	パネルディスカッションの手順を知る。テーマを知る。	全体
2	1	現在の車の問題点について考える。	個人
	2	車について情報を集める。	個人
	1	自分の提言を決め、集めた情報から必要な情報を選ぶ。	グループ
	1	似た提言を選んだ者で構成した班で話し合っ提言を決める。	
3	2	パネルディスカッションに向けた発表資料を作る。	グループ
	1	発表資料を使って練習する。	グループ
	1	パネルディスカッションを行う。	全体

4 指導の実際

(1) NHKの動画教材やワークシートを活用することで、意欲が高まり、活動への見通しをもつ児童

1時間目。ビデオ「パネルディスカッション」とNHK「伝える極意」を教材とし、パネルディスカッションの手順を指導し活動への見通しをもたせた後、テーマが「未来に造りたい夢の車」であることを伝えた。話し合った内容が担任の友人の会社でプレゼンされることを聞いた児童は、「面白そう!」「やってみたい!」と反応し、学習意欲を高めることができた。

2時間目。以前、別のクラスの実践で「夢の車」というテーマだけを与えた時、「中が遊園地になっている車」「フルコースが食べられる車」など、あまりにも現実とかけ離れた発想をする児童が多かった。そこで、今回は現在の車社会が抱える問題点について考え、それを解決することを学習課題に設定した。

現在の車社会が抱える問題点について次のような意見が挙がった。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・事故(スピードが出すぎる, ドアに手をはさむ, たばこ・スマホのながら運転, 信号無視, 追突, 居眠り など)・飲酒運転・ガソリン代が高い・資源がない・道に迷う・排気ガス・エンジン音(騒音)・よごれる・盗難・渋滞・傷がつきやすい・乗り心地が悪い(内装, ゆれる, 車内の空気, ベルトなど) |
|--|

児童は、この中から自分が最も深刻だと思う問題点を選び、3、4時間目にその解決策について資料を集めた。

5時間目。集めた資料を整理しながら、改めて自分の訴えたいことは何かということを考えていった。自分の提言したい点をはっきりさせてから根拠となる情報を3つ選択するように指導した。

A児が「わき見運転事故が起こらない車」という提言の根拠として選択した資料と選択しなかった資料は次の通りである。

選択した資料

- わき見運転による事故数を表したグラフ
- 車のスピードとわき見をする時間に進む距離との関係を表したグラフ
- 現在開発されている車間距離を一定に保つ車の情報

選択しなかった資料

- わき見運転に対する刑罰 ●世界のわき見運転事故の年間推移を表わすグラフ など

A児は、ワークシートを基にしながらか、資料をもとにして根拠を明らかにして、自分の提言をグループの仲間に伝えることができた。

(2) 提言の言葉を吟味することで、自分の思いを深める児童

6時間目。似た問題点を選んだ者同士のグループ（教師が作成）で自分の提言を発表した後、グループの提言を話し合った。その際、「吟味（入念に調べ、検討すること）」という言葉教え、一文字、一文字に気を配るように指導した。B班は、「排気ガスが少ない車」「排気ガス0の車」「環境にいい車」という3つの提言が出され、話し合った。

B1:「排気ガスが少ない車」では、排気ガスが少しは出るという意味になってしまうよね。だから私は、「排気ガスが0の車」がいいと思うよ。

B2:「排気ガスが0の車」もいいけど、例えば代わりに電気エネルギーを使えば、その電気を生み出すために環境が破壊されるかもしれないでしょ。だから、私は、自分でエネルギーを生み出せるような「環境にいい車」がいいと思うな。

班で一つの提言を決める際に付箋を用いた。全員の考えを可視化し、分類・関連付けをすることで互いの考えの類似点や相違点に着目できるようにした。提言の言葉を吟味することで、提言に対する思いをさらに強くすることができた。

(3) 共同作業により思いを共有し、さらに強い思いをもつ児童

7～9時間目。パネルディスカッションの本番に向け、児童は発表資料の準備や発表の仕方、映り具合を何度も確かめるなど、どうすれば自分たちの提言のよさが伝わるかということを考えながら、準備をしていた。NHK「伝わる極意」から、よい発表のキーワードとなる「頭でつかむ!」「質問を投げかける」「『実は…』を使う」を意識しようと呼び掛けることで、班全体で常にそのことを意識しながら準備を行っていた。

10時間目。パネルディスカッション本番では、8名のパネリストがグループで協力しながら発表した。班で話し合っけて決めた「未来に作りたい夢の車」について、その提言がいかに重要であるかという根拠を明確にしながらか話し合いをすることができた。

パネリストとして参加したB児の発言（ビデオより）

「ぼくたち2班の提言は、『環境にいい車』です。提言の理由は、現在、排気ガスによる環境破壊が深刻だからです。このグラフを見てください。（スクリーンを指さしながら）このグラフは、空気中に含まれる排気ガスの成分のグラフです。このグラフを見ると、2008年頃から…（続く）」

フロアの児童は自分の班の提言と比べながらか、熱心に画面を見たり、メモをとったりしていた。また、フロアからの質問に自分の班の代表（パネリスト）が答えられないときには、同じグループのフロアの児童が、自分の資料を基に答える姿が見られた。

IV 成果と課題

1 成果

(1) 動画教材を活用し、学習形態を工夫したことで、話し合いの見通しをもちながら適切な資料収集をさせることができた

次の表は、パネリストの児童とフロアーの児童（司会を含む）の提言発表用のワークシートから語彙数とデータ数を比較したものである。これを見ると、パネリストとフロアーの児童は、ほぼ同じ情報量をワークシートにまとめていることが分かる。「個人→グループ→全体」という、学習形態を組むことで、児童はより多くの新しい知識を得ることができたと言える。また、ワークシートの内容を見てみると、語彙では、「人工知能」「コネクティッドカー」「燃料電池自動車」「ミドリムシ発電」など、専門的な語彙が多く使われていることが分かる。話し合いの見通しをもてたことでより多くの新しい情報を得ることができた。

	パネリスト	フロアー
語彙数	22.5	21.9
データ数	3.7	3.6

(2) 提言の言葉を吟味させることで、テーマに対して強い思いをもたせることができた
各班で自分の班の提言を決める話し合いの中で多く出たキーワードが次とおりである。

提言を吟味したときのキーワード（児童の話し合いの様子から）

- 事故を「減らす」「無くす」「起こさせない」
- 排気ガスを「あまり出さない」か「全く出さない」

「事故を減らす」という提言に対して、『減らす』では、少しは起きてもしようがないという感じがするから、『無くす』にした方がいい。」「事故を起こすのは人だから、人に事故を『起こさせない』車がいいと思う。」という意見が出された。提言に用いる言葉を吟味させることで、児童は自分のグループの提言により強い思いをもつことができた。

(3) 共同作業を行わせることで、思いを共有しより強い思いをもたせることができた

パネルディスカッションやその準備作業を共同で行うことにより、児童は、自分のテーマについて思いを共有し、さらに強い思いをもつことができた。そのことで、パネルディスカッションにより積極的に参加することができ、新たな思いをもつことができた。

『飲酒をしていると走らない車』を提言していた C 児の感想（ワークシートより）

私は、『飲酒をしていると走らない車』があれば、飲酒運転の事故が無くせると思ってたけれど、他にも事故の原因になることがたくさんあって、それも防がないといけないことが分かりました。でも、パネルディスカッションをしてみて、確かに交通事故も起きてほしくないけれど、一番大切なのは、地球全体のことを考えることだと思いました。人間だけでなく、動物や植物にも優しい車をプレゼンしてほしいです。

C 児は、自分の提言に強い思いをもちながらも、地球全体に視野を広げ、みんなのための自動車を造ってほしいという思いを深めることができた。

以上、3点の成果と児童の姿から、話し合い活動の単元構成や学習形態を工夫することにより、児童がテーマについて知識を深め、思いをもちながら話し合いを深めることができたと考える。

2 課題

今回は、パネルディスカッションという形式に限って実践を行った。今後は、別の形式となるディベートや、より自由に話し合いを行う座談会においても、児童が思いを深められるような工夫を探ることで、「討論する力」をより一層高めていきたい。

<参考文献>

- 月刊国語教育研究 No.464, 日本国語教育学会, 2010
- 話しことば教育の復興 1, 森久保安美, 1993